

# 19世紀シェイクスピア編纂本（1）

——ケンブリッジ版シェイクスピア全集（1863-6年）  
編纂の核心にあるもの——

The Nineteenth Century Shakespeare Editions (1): The Core  
of the Editing *The Cambridge Shakespeare* (1863-6)

金子雄司

## 要 旨

1863年～1866年に出版されたケンブリッジ版シェイクスピア全集（*The Works of William Shakespeare*）全9巻はその後約1世紀にわたり、シェイクスピア作品標準版とされた。そして、その本文のみを1冊本としたグローブ版全集（*The Globe Edition* 1864年）が多くの読者を得たばかりでなく、様々なレファレンス図書の引用元として（特に、その行番号が有益）用いられた。19世紀にはシェイクスピア全集版が800余点出版されたが、（全てが新たに編纂されたわけではない）ケンブリッジ版全集・グローブ版ほど長く標準番として長寿を保ったものは他にない。本稿は、新たな編纂方針とそれを支える新理論および背景を探ろうとするものである。

## キーワード

ケンブリッジ版シェイクスピア全集、ケンブリッジ大学、  
グローブ版シェイクスピア、ラハマン方式、マクミラン社

18世紀におけるシェイクスピア作品編纂の総決算と見做される第3集注版シェイクスピア全集（Malone-James Boswell版 21巻）が1821年に出版された。この全集は文字どおり、先行編纂本の本文、注釈、などを余すところなく集約することを目的とした。19世紀におけるシェイクスピア編纂本出版は膨大な数に上る。研究書によると、17世紀には、編纂本全集（集成）4

点出版されているが、18世紀には、80点超の全集本が出版された。けれども、19世紀には、全集本出版数は800点を超える。更に、作品単独の編纂本は約2,700点に上る<sup>1)</sup>。

シェイクスピア編纂本出版数の多さには、様々な理由があるのは容易に想像することが出来よう。先ず、英国の人口増加、産業革命による製紙・印刷工程の機械化、学校教育の普及、出版業の繁栄、広範な読者層の誕生、などが思い浮かぶところである。本稿では、19世紀中頃に出版されたケンブリッジ版全集を主に取り上げて、母国語作品編纂がどのような理念の下に、どのような手法で行われたのかを検討する。

シェイクスピア作品編纂本全集出版史で、1709年出版ニコラス・ロウ (Nicholas Rowe 1674-1718年) によるシェイクスピア編纂本は特筆すべき点が多いところがあった<sup>2)</sup>。そのひとつは編纂者名をタイトル・ページに表記したことである。即ち、'Revis'd and Corrected, with an Account of the Life and Writings of the Author. By N. Rowe, Esq.' と表記された。ロウ版に始まる18世紀の全集本出版史には、名だたる編纂者たちが連なる。主立った編纂者名を挙げるならば (カッコ内は出版年) —— ポープ (Alexander Pope 1725年), シオボールド (Lewis Theobald 1733年), ハンマー (Thomas Hanmer 1744年), ウォーバトン (William Warburton 1747年), ジョンソン (Samuel Johnson 1765年), ケイベル (Edward Capell 1767年), スティーヴンス (George Steevens 1773年), マロウン (Edmund Malone 1790年) など。これらの編纂者たちの名前に敬称 (例, Mr. と Esq.) が付けられることは普通であるが、それ以外の地位・職業・学位などを表す肩書きが付されている編纂者はひとりもない。上記編纂者たちの学歴を見ると、大学で古典語を専攻した形跡はない。ケイベルを例外として、別の視点から見ると、文学作品編纂者という専門家、あるいは、文学作品編纂を行うに相応しい地位、あるいは、職業がなかったといえよう。つまり、英語作品編纂を専門的に行う職業・地位というも

のが確立されていなかった。断るまでもないが、ここでの作品とは英語による作品ということである。聖書、古典編纂は学問として長い歴史を有していたし、専門家も存在した。ロウは大学教育を受けていない詩人、劇作家。ポープは学校教育をほとんど受けていない。シオボールドは貴族の子弟と共に家庭教育を受けた後、法廷弁護士の見習生を経て弁護士になった。ハンマーはオックスフォード、ケンブリッジ両大学に学び、ケンブリッジ大学法学博士となった。その後、政治家になり、庶民院議長となる。ウォーバトンはグラマー・スクール卒業後、法廷弁護士のもとで司法修習生の経歴を積み、弁護士となった。ジョンソンはオックスフォード大学に入学するも、卒業はしていない。ケイベルはケンブリッジ大学卒業。後に劇検閲副長官（Deputy Inspector of Plays）。スティーヴンスはケンブリッジ大学に学ぶも、卒業はしていない。マロウンの学歴はダブリン大学トリニティ・コレッジ卒業およびインナー・テンプル法学院。こうして18世紀の主たるシェイクスピア全集編纂者たちの学歴・職業を見ると、極端な言い方をすれば、シェイクスピア作品という英語文学作品編纂を学術的に行う素地を備えた編纂者はひとりもいなかった。その観点からすれば、全員が「アマチュア」<sup>3)</sup>だった。英国の古典語（古代ギリシア語・ラテン語）および聖書編纂者たちが大学などの高等教育機関でしかるべき教育・研究を経た後に、汎ヨーロッパ的本文編纂伝統のなかで、聖書、古典の本文校訂作業を行っていたこととは対照的である。

さて、1863-6年に出版された通称ケンブリッジ版シェイクスピア全集（全9巻）第1巻のタイトル・ページを以下に示す。

The Works | of | William Shakespeare | Edited by | William George  
Clark, M.A. | Fellow and Tutor of Trinity College Cambridge, and Public  
Orator in the | University of Cambridge; | and John Glover, M.A. |

Librarian of Trinity College, Cambridge; | *Volume I.* | Cambridge and London: | Macmillan and Co. |1863.

クラーク (William George Clark 1821-1878年) はケンブリッジ大学トリニティ・コレッジで古典を専攻して優秀な成績で卒業した。そして、引き続きフェロウおよびチューターに選出されて大学に残った。学位は M.A. グラヴァー (John Glover 1858-1863年) は同コレッジ図書館長 (Librarian) であり、同じくケンブリッジ大学 B.A. (古典専攻) ならびに M.A. 保持者である。ただし、ケンブリッジ大学で、中世・近代語専修課程の副専攻 (subdepartment) として英文学科が設置されたのは1878年のことである。そして、専修課程 (Tripos) として導入されるのが1914年であり、学部 (Faculty) となるのが1926年のことであった。よって、クラーク、グラヴァー共に英文学者ではなかったのは当然のことである。ちなみに、イングランドで最初の英文学科が設けられたのはロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジで、それは1828年のことであった。ダウデン (Edward Dowden 1843-1913年) がその初代教授に就任した。また、オックスフォード大学に英語・英文学科マートン教授職が設けられたのは1885年のことである<sup>4)</sup>。

*The Works of William Shakespeare* (全9巻) は1863年から1866年にかけて出版された。別名 *The Cambridge Shakespeare* (本稿では、以下「ケンブリッジ版 (全集)」および *The Cambridge Shakespeare* と称する)。第1巻に付された 'Preface to the First Edition' には、冒頭 'the main rules' として、6項目が掲げられている<sup>5)</sup>。それら項目の要点を以下に述べるならば――

- ① 本文校訂の基礎として、第1～第4フォリオ版、クオート版、先行編纂本およびその注を徹底的に校合する。
- ② 上記①作業の全結果を各ページ下部に記す (textual apparatus)。加え

て、本編纂者が集め、提案する推測による本文校訂も簡潔にページ下部に記される。これにより、読者は本全集の本文がいかにして生成されたかを簡便に識ることが出来る。

- ③ クオート版がある作品本文と公認本文 (the received text) との異同が、脚注では示すことが出来ない程である場合には、クオート版の当該箇所を公認本文の後に小さいポイント活字で文字どおりに記す。
- ④ 参照を容易にするために、場ごとに行数番号を付す。
- ⑤ 各作品本文の後に注を付す；(a) 脚注のスペースに収まりきれない分量の注、(b) 上述の編纂原則から離れる場合、その理由を明らかにするため、(c) きわめて難解な、または、興味深い箇所を深く説明するため。
- ⑥ 詩を第9巻に納める。本文校訂は劇作品に準ずる。

そして、このような方針に従って編纂作業をなしたのは、ケイペルが収集し、トリニティ・コレッジに寄贈したシェイクスピア初期印刷本のおかげであると彼らは述べている。だが、ケンブリッジ版編纂方針がそれ以前の編纂全集本のそれと明確に異なるのは、その編纂方針が概ね古典本文編纂法に則っていることである。‘received text’, ‘literatim’, ‘ceteris paribus’などの用語を使用していることからそのことは見て取れる。というのも、19世紀英国アカデミズム（古典および聖書文献学）に大きな影響を与えたのが、ドイツで目覚ましい成果が生み出されていた文献学である。特に、ラハマン（Karl Lachmann 1793-1851年）の古典・聖書編纂における業績はその代表例である。聖書および古典語・文学本文の主たる編纂法はラハマン方式（Lachmann Method）と命名されている。その簡潔な説明をするならば<sup>6)</sup>——制作時期も制作者も異なる複数の写本を念入りに分析（*recensio*）するならば、それぞれの写本の誤記群に共通の誤記が含まれる。それにより、

原型 (archetype) に遡ると推定される写本の系譜 (あるいは、ステマ) を構築することが可能である、とする。要するに、複数の写本に出現する誤記の一致は共通の本文の起源を包含するという原理を考案したのである。換言すれば、本文生成の歴史を科学することを基軸とした本文編纂法であった。そして、この原理に基づき編纂された新約聖書 (初版1831年) およびルクレティウス (1850年) はラハマンの代表的校訂本であった。

19世紀初頭までの古典文献編纂と英語文献編纂の間に横たわる溝はきわめて深いものであった。古典学者たちと同様に、19世紀半ばまでに、聖書学者たちは、旧約聖書の源泉に遡るという探求の見直しを行い、その結果、旧約聖書であろうと、現存する写本群を歴史的・言語学的に細密に分析する他ないことを予想するに至っていた。そのことを如実に例示したのがアイヒホーン (Johann Gottfried Eihhorn 1753-1827年) 著『旧約聖書序説』 (*Einleitung ins Alte Testament*, Leipzig 1780-3年) である。アイヒホーンによれば、旧約聖書といえども、言語学的には世俗文書と何ら変わるところがないばかりか、本文には筆写作业という層が幾重にもあるゆえに、「超越的な」もしくは「原初の」本文に到達することは出来ない。また、ヴォルフ (Friedrich August Wolf 1759-1824年) は『ホメーロス序説』 (*Prolegomena ad Homerum* 1795年) で同様の見解を述べている。即ち、ホメーロスの原作に辿り着くことは出来ない、と。その理由は、何代にもわたる筆写作业を経て写本が伝えられてきたからである<sup>7)</sup>。古典本文校訂に関するこれらの、主に、ドイツの革命的学説は英国でも影響力があった。先に触れたケンブリッジ版編纂方針にはそれを読み取ることが出来る。古典学を専攻したケンブリッジ版の編纂者たちにも、それは共有されていたことは当然のことであろう。1789年にオックスフォードで出版されたドイツ語書籍カタログには、アイヒホーンの2著作 *Allgemeine Bibliothek der biblischen Literatur* (10 vols. 1787-1803年) と *Einleitung in das Alte Testament* (5 vols. 1780-1783年) が 'Philosophy, Morality

and Theology' セクションに掲載されている<sup>8)</sup>。

ケンブリッジ大学で古典学を専攻したクラークとルアード (H. R. Luard) がこの全集本編纂を計画し、1860年に『リチャード二世・第1幕』(*Richard II, Act I*) を、先に挙げた方針により編纂してパイロット版として出版した。新たな編纂方針の解説とそれに基づく校訂版を広く識者に提供して、自らの計画に対する評価、批判を募ることが目的であった。ルアードはケンブリッジ大学トリニティ・コレッジで数学を専攻したが、文学にも造詣が深かった。その後、学内の要職に就任したために、ケンブリッジ版編纂には関わらなくなった。全集の版元はマクミラン社である。マクミラン社の計画は「古典作家の校訂版のように編纂された」シェイクスピア全集を出版することであった<sup>9)</sup>。そして、このパイロット版で編纂者たちが提唱した編纂法とは「ラテン語、あるいは、ギリシア語古典を編纂する際の通例となっている流儀」である<sup>10)</sup>。示された編集方針は次のようである。

The text is generally formed on that of the first quarto, every variation in the second, third, and fourth quarto, and the first two folios being given. If the reading in the first quarto seemed satisfactory, and not in need of alteration, it has been always retained; when this text appeared faulty, it has been altered from the subsequent editions, the reading which has the greatest weight of authority being chosen. When none of the early editions give a reading that can stand, recourse has been had to the later ones; conjectural emendations have been rarely mentioned, and never admitted into the text when they appeared in our judgment to carry certain conviction of their truth with them.

【訳】 作品本文は全体的には、第1クオート版のものを使用し、第2、第3、第4クオート版のすべてのヴァリエント、そして第1、第2フ

オリオも対象となる。第1クオート版の読みが満足のいくもので、変更の必要がないと思われる場合は、常にそれを残し、この本文に欠陥があると思われる場合は、その後の版から読みを採って変更し、最も権威のある読みが選ばれている。初期版のどれもが耐えうる読みを示していない場合は、後期版に頼った。推測による校訂はほとんど言及されず、我々の判断でそれが真実であるという確信が持てる場合を除き、本文に繰り込んではいない。

これら2人の編纂者に、編纂原理を与えたのがラハマンだとすれば、実例を示したのがドイツ人言語学者モムゼン (Tycho Mommsen 1819-1901年) である。彼は1859年に、1597年から1709年までに出版された『ロミオとジュリエット』クオート版全ての本文ヴァリエントを調査したのである<sup>11)</sup>。このように、19世紀において、言語学のみならず、シェイクスピア作品編纂についても、ドイツは英国に先駆けていたことには注目すべきである。ちなみに、シェイクスピア生誕300年を記念して、ドイツ・シェイクスピア協会 (Deutsche Shakespeare-Gesellschaft) が1864年に結成されている。

19世紀英国において、古典語を対象とする言語学 (philology) が母国語 (英語) をも対象とするようになる。この変化を如実に示す事例として、*A New English Dictionary* (NED のちに *The Oxford English Dictionary* と命名。以下、本稿では *OED* を用いる) 編纂計画を挙げる事が出来る。この辞書のフルタイトル *A New English Dictionary on Historical Principles; Founded Mainly on the Materials Collected by The Philological Society* (1884-1928年) には、ケンブリッジ版全集と共通する原理を読み取れよう。「歴史的原理」とは、つまり、英語を単語レベルで、その意味、用法を歴史的変遷の中で把握しようとする原理である。この一大事業は1857年に言語学協会 (The Philological Society) により始められた。この学術団体の設立は1842年であるが、その母体はロ



ンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジに1830年に創設された同名の学会であった。その目的には 'to investigate and promote the study and knowledge of the structure, the affinities, and the history of languages' と記されていた<sup>12)</sup>。つまり、英語を歴史的文脈において精査することである。そのため資料として、古英語、中世英語研究促進を目的として、言語学協会を設立した中心人物がファーニヴァル (F. J. Furnivall 1825-1910年) であった。彼の学術上の活躍は多岐にわたる。初期英語テキスト協会 (The Early English Text Society 1864年設立)、新シェイクスピア協会 (The New Shakspeare Society 1874年) がその例である。

このような母国語文学作品についての新たな認識と、それに基づく学術活動の活発化はシェイクスピア作品に限ったことではなかった。彼の同時代劇作家への新たな関心が生まれたのもそのひとつの表れである。それを如実に示すのが、19世紀に編まれた詩人・劇作家たちの全集・選集の出版である。主なものを掲げるならば、以下のようになる (編纂者名とその編纂した全集・選集出版年)<sup>13)</sup>。

- ・ギフォード (William Gifford 1756-1826年)

マッシンジャー (1805年)、ジョンソン (1816年)、フォード (1827年)、  
シャーリー (Dyce と共編1833年)

- ・ウイーバー (Henry William Weber 1783-1818年)

フォード (1811年)、ボーモント＝フレッチャー (1812年)

- ・ダイス (Alexander Dyce 1798-1869年)

ピール (1828年)、ウェブスター (1830年)、グリーン (1831年)、ミドルトン (1840年)、ボーモント＝フレッチャー (1843-46年)、マーロウ (1850年)、ギフォード編フォード全集改訂 (1868年)、【シェイクスピア (1857年)】

- ・カニングガム (Francis Cunningham 1820-75年)
  - マーロウ (1870年), マッシンジャー (1871年), ジョンソン (1871年)
- ・グロウサート (Alexander Balloch Grosart 1827-99年)
  - グリーン (1881-85年), ナッシュ (1883-85年)
- ・シェパード (Richard Herne Shepherd 1842-95年)
  - チャップマン (1873年, 1874年), デカー (1873年), グラブソーン (1874年), ヘイウッド (1874年)
- ・コリンズ (John Churton Collins 1848-1908年)
  - ターナー (1878年), グリーン (1905年)
- ・ブレン (Arthur Henry Bullen 1857-1920年)
  - 英国古劇選集 (1882-89年), マーロウ (1885年), ミドルトン (1885-86年), マーストン (1887年)

このリストにある編纂本の中には、長寿を保ったものもある。例えば、ブレン編纂ミドルトン全集 (上記ダイス版を元に編纂) は、2008年に *Thomas Middleton: The Collected Works* (Oxford University Press) が出版されるまで、唯一の全集であった。このリストは母国語による文学作品研究がアカデミック領域のものになったことを示している。シドニー・リーによると、コリンズはオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学での公開講座講師として英文学を講じた。その時期から、オックスフォード大学カリキュラムで、英文学が無視されていることを改善する必要があること、また、古典と英文学を連携することが効果的な教育に繋がることを熱心に提唱していた。結果、1885年に英語・英文学マートン教授職が創設された。だが、その席に着くことを夢見ていたコリンズとは別人がその教授職に就いた。

ケンブリッジ版全集についてさらに詳しく見てみる。編纂者としてクラ

ークとグラヴァーの氏名が学位とケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ所属の肩書きがタイトル・ページ印刷されていることは、既に言及したとおりである。更に、タイトル・ページには印刷所がゴチック体で ‘Cambridge and London’ とあり、版權所有ページには ‘Cambridge: | Printed by C. J. Clay, M.A. | At the University Press.’ とある。更に、献辞ページには ‘To His Grace | The Duke of Devonshire, K.G. | Chancellor of The University of Cambridge’ と印刷されている（下線は引用者）。ケンブリッジ大学のプレゼンスをこれだけ強調していることは注目に値する。それがマクミラン社の販売戦略であった可能性は否定出来ないものの、伝統ある大学の由緒あるコレッジに属する研究者が、母国語による文学作品をギリシア・ラテン語文献編纂と同様の学術的手法で編纂する——このようなメッセージがそこにはあることを、編纂者たちもかなりの部分で共有していたことであろう。ただし、その第2巻以降にはグラヴァーの代わりにライト（William Aldis Wright 1831-1914年）の名前が現れることになった。グラヴァーが聖職禄を得て、任地ワイト島に赴任することになったため、ライトはトリニティ・コレッジ図書館長としての後任である。1863年のことであった。ライトもまたケンブリッジ大学トリニティ・コレッジでB.A.とM.A.の学位を得ている。また、後年のことになるが、欽定聖書・旧約聖書改訂委員会（The English Revision Committee: Old Testament Company）書記を務めている<sup>14)</sup>。先に述べたとおり、ライトはドイツ聖書研究の実情を知悉していたと思われる。ケンブリッジ版全集以外の本文校訂の実績としては、Roxburgh Club, EETS, Rolls Series のための中世英文文献がある（ちなみに、欽定聖書・旧約聖書改訂委員会は1870-85年間に会議を794回開催したが、ライトが欠席したのは1回のみであった）。

18世紀シェイクスピア編纂本の大きな特徴として、「推定による校訂」（conjectural emendation）を挙げることが出来る。やや大袈裟に言えば、多く

の編纂者たちが推定による校訂に熱中した。ケンブリッジ版編纂方針の特徴のひとつとして、推定による校訂を極力避けることがある。それはいかなる理由に基づくのか。上に引用したパイロット版『リチャード二世・第1幕』の序に書かれているとおりである。

以下に、ケンブリッジ版全集初版の序から、この引用にまつわる部分を手短かにまとめる——F1の読みが明らかに正しくなく、しかもそれ以前のクオート判にも正しい読みと思われるものがない場合、シオポールド版の絶妙なる考案に頼ることがしばしばであった<sup>15)</sup>。そして、推測による校訂を一切行わない理由として、第1に「F1の読みが全く不可能であるとわれわれが確信しない限り、その読みが韻律上、もしくは、文法上、もしくは、意味上優れていると考えるから」であるとしている。第2に、この種の推定は蓋然性があるというに過ぎないから、とも述べられている。本文校訂の鉄則のひとつ‘*ceteris paribus*’、即ち、正しいと思われる読みがふたつある場合には、より難しい方の読みを採る、という校訂原理が常に正しいとは限らない<sup>16)</sup>。

本文編纂の底本として、ケイベルがトリニティ・コレッジに寄贈したF1-4と初期印刷クオート版を徹底的に校合して、その結果から最良と信じる版を、作品編纂底本に選定するのがケンブリッジ版編纂者たちの踏むべき手続きであった。そして、編纂者たちが初期印刷本に備わっている（と信じる）読みを折衷的に取り入れたのである。批判的（即ち、折衷）本文編纂と呼び変えてもよい手法である。このような古典編纂法を範として採用する編者たちにとって、最大の目標は本文の確立であり、従って、ケンブリッジ版全集の脚注に、語釈がほとんど付されていないことは納得出来ることである。

このように、校合した結果から最良と信じる版を底本と選定して、本文を編纂するのは「最良本文 (best-text)」<sup>17)</sup> 編纂法と呼ばれる。ただし、何を

以て最良本文とするかは、編纂者の設定する基準による。ある編纂者はその写本・印刷本と作者の近接性を、また、ある編纂者は誤記・誤植の少ない写本・印刷本を選定するという具合に、である。この学説はフランスの中世文献学者ベディエ（Joseph Bédier 1864-1938年）により提唱された。単一の写本を最良の本文として選定して、明らかな誤記のみを校訂する、保守的・批判的本文編纂法である<sup>18)</sup>。ケンブリッジ版編纂者たちが行ったのは、このような編纂法であった。20世紀半ばに、同じトリニティ・コレッジ関係者により提唱されることになる、「底本原理」(The Rationale of Copy-text)への道を拓く業績であった<sup>19)</sup>。

ケンブリッジ版全集編纂方針の特徴には以下の事柄がある：①文法的な誤りと思われるものでも、それが印刷工程で発生したものであると確信出来ない限り、シェイクスピア作品本文を改訂しない方針である。換言すれば、19世紀までに系統立てられた英語の規則に合わせるために、本文を校訂しないという方針である<sup>20)</sup>。②正書法については、それが確立されていなかったエリザベス朝の本文を、19世紀の正書法に当て嵌めようとすることは、シェイクスピア本文を恣意的な法則に従わせることになる<sup>21)</sup>。③韻律に関する校訂は文法事項以上に注意が必要である。19世紀の韻律形式はエリザベス朝のそれとは大きな違いがある。近代のシェイクスピア本文編纂者たちは、シェイクスピア本文韻律校訂に情熱を注いできたが、ケンブリッジ版全集はそれについては慎重である<sup>22)</sup>。④句読法については、ケンブリッジ版全集はフォリオ版、クオート版を踏襲しない。ポーブ版からダイス版、ストーントン版（Staunton版 1856年）に至る先行編纂本に従う<sup>23)</sup>。⑤脚注には、（ここでは主としてF1を指す）採用した読みの根拠、先行編纂本が採用していて、本全集とは異なる読み、これまで行われた推測による校訂のリストを記す<sup>24)</sup>。

また、序文後半（p. xx 以下）にはF1以降の編纂本全集・選集について、

発刊年順に取り上げて、解説を付している。18世紀に出版された編纂本に散見された、先行する編纂本の弱点を殊更に取り上げる（時として、難ずる）ごとき姿勢は、ケンブリッジ版全集編纂者たちには見られない。ケイペル版をきわめて高く評価しているとはいえ、それは彼の収集したシェイクスピア初期印刷本89冊を含む383点を編纂に利用出来たことへの感謝の念からのものとばかりとは限らない。18-19世紀出版のシェイクスピア作品集編纂本についての後世の評価は、ケイペル＝ケンブリッジ版編纂者こそ、その後の本文校訂学の先達であると認識している。本文編纂上の様々な論点において、ケンブリッジ版全集には不十分な点、間違った点が多々あることを痛烈に指摘した上で、パワーズ（Fredson Bowers 1905-1991年）は、ケンブリッジ版全集は「本文状況を体系的な再検討により形成された、今日〔注：1964年〕に至るまで言及する価値のある唯一の完全な本文」<sup>25)</sup>であるとしている。シェイクスピア編纂本を歴史的に見ると、ケンブリッジ版の最大の特質は、クラークとライトが本文の確立にのみ関心があったことである。パワーズが評価するのはその点であろう。推測による校訂について、ケンブリッジ版編纂者が18世紀の編纂者たちと一定の距離を置くのはいかなる理由からであろうか？ 作品本文に難解で、意味が通じない箇所があるときに、意味を通じさせようとする知的営みが推測による校訂である。そこには、登場人物、場の状況、劇全体についての編纂者の解釈が根底にある。だが、その推測には確たる歴史的根拠があるわけではないのであるから、ケンブリッジ版編纂者は歴史的事実に私的解釈を差し挟むことを控えようとする禁欲的な姿勢を取っていたのではないかと思われる。それを「科学的」と呼んで差し支えないであろう。書誌学の科学性は20世紀初頭に台頭することになる新書誌学へ道が繋がっていくことになる。そして、その科学性が疑われるまでに、更に半世紀を要することになる。

ケンブリッジ版全集についての *The Reader* 誌掲載の書評（1863年4月4日

号)は、書名『ケンブリッジ・シェイクスピア』が重要であることを強調して、次のように述べる。

THERE is significance in the name of “The Cambridge Shakespeare,” under which this new edition of the works of the poet has been advertised, and by which it will probably be known. That the accuracy of scholarship, the refined taste, the care for minutiae in combination with a spirit of general culture, which we look for in men resident at a University, and which have exercised themselves heretofore in editing Greek and Latin classics, might find as congenial and as profitable in the editing of some of our own English has been a thought long present to many minds, and more than ever since English literature has come within the scope of academic philology.

【訳】「ケンブリッジ・シェイクスピア」という名称には大きな意味があり、その名の下にこの詩人の作品の新版が宣伝され、またおそらくこの名称で知られることになるであろう。ギリシャ語・ラテン語古典の編纂に携わってきた大学の研究者に求められる、正確な学識、洗練された審美眼、幅広い教養の精神に裏打ちされた細部へのこだわりが、英語の古典編纂にも活かされるかもしれないということは、多くの人の心に長く存在してきた考えであり、英文学が文献学の範囲に入ってきてからにはなおさらであった。

母国語による文学作品を古典語作品と同列に置き、その本文校訂手続きにおいても古典語作品のそれと同等であること、伝統ある大学の古典学者が古典編纂と同様の手法でシェイクスピア作品本文を編纂すること、大学教育・研究の分野に英文学がオックスブリッジに取り入れられる機運が見ら

れること、などが19世紀中頃の英国文化に認められる大きな変化である。

先に触れたが、ケンブリッジ版編纂者が序でモムゼンの言語学上の業績を取り上げているのは注目に値する。モムゼンは『ロミオとジュリエット』の最初期印刷本（1597年クオート版）から1709年ロウ版までの全印刷本の校合を行って、結果を1859年に発表した。ケンブリッジ版編纂者たちは、モムゼンの手法にやや批判的ではあるものの、モムゼンの勤勉さを絶賛している。また、英国のシェイクスピア編纂者たちが払った労力をモムゼンは大いに利用しているとの批判も一部にはあった。だが、ケンブリッジ版編纂者たちは、モムゼンが「英国人編纂者たちの労苦を、嘲笑うことなく、利用していることは手本とすべき」としている<sup>26)</sup>。ケンブリッジ版全集は第3版（1891年）以降、編纂者はライト1人になっている。ライトは本文と各作品の末尾に付されている本文に改訂を施すと共に、各作品末尾に付されている主として本文に関する‘Notes’を大幅に追加した。

グローブ版（The Globe Edition）シェイクスピア全集は1864年に出版された。編纂者はケンブリッジ版全集を手掛けているクラークとライトである。ケンブリッジ版全集の本文の大部分をほぼそのまま採用して、本文比較資料（textus apparatus）を省いた1冊本全集である。ただし、タイトル・ページに‘Globe’の文字はない（略標題紙（fly-title）にThe Globe Editionとある）。タイトルはケンブリッジ版全集と同じ *The Works of William Shakespeare* となっている。また、編纂者たちの肩書きも印刷されていない。ケンブリッジ版全集は1863年から3年掛けて全9巻を出版したことを考えると、グローブ版はかなりのスピード編纂・出版であった。巻末に85ページに及ぶ‘Glossary to Shakespeare’s Works’を付したことは、それまでに出版された全集本にはない新機軸であった。グロッサリー担当は、ロンドン大学キングズ・コレッジのジェフソン（Rev. J. M. Jephson）である。ケンブリッジ版全集とは異なり、脚注などが印刷されていない、本文のみのクリーンなペ



ージ・レイアウトである。

マクミラン社がクラークとライトに、この名称 ‘The Globe Shakespeare’ を提言したとき、クラークとライトは否定的であった。その代わりに2人が提案したのが ‘Hand Shakespeare’ という名称であった。ケンブリッジ版編纂者たちにとっては、The Globe Shakespeare は「安っぽい」ネーミングと思われたのであった<sup>27)</sup>。だが、マクミラン社には更なる計画があった。グローブ版シェイクスピア全集を出発点として、Globe Edition（別名 Globe Library, Globe Series, New Globe Poets）と称する英国詩人全集・選集シリーズを刊行するというものであった。1864年刊シェイクスピアから始まり、1924年刊 *The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti* まで全27点刊行された。このシリーズの目指すところは、英語文化圏の「あらゆる階級の人々が完全かつ正確な」作品本文を備えた手頃な値段の本を手に入れるようにすることであり、それも英文学の「最高の知性」の作品を、である<sup>28)</sup>。このシリーズは少なくとも1976年まで出版され続けた。ただし、グローブ版序で、クラークとライトは「グローブ版」という名称について、読者には「僭越とも不適切とも」思われまいであろうとして、次のように続ける。

It seems indeed safe to predict that any volume which presents, in a convenient form, with clear type and at a moderate cost, the complete works of the foremost man in all literature, the greatest master of the language most widely spoken among men, will make its way to the remotest corners of the habitable globe.

【訳】 予測しても全く差し支えないと思われるが、あらゆる文学の第一人者であり、地球上で最も広く話されている言語の最も偉大な第一人者の全作品を、便利な形で、見やすい活字で、安価に提供する1巻であれば、居住可能な地球の最も遠い隅々にまで道を拓くだろう<sup>29)</sup>。

次に引用する、1年前に出版したケンブリッジ版全集第1巻の序と比較すると、対象とする読者層の違いを意識している編纂者の姿がある。識者たちから手応えのある反応をえて、編纂者たちは次のように述べている。

This concurrence of opinion leads us to hope that our Edition will be found to supply a real want, while, at the same time, the novelty of its plan will exempt us from all suspicion of a design to supersede, or even compete with, the many able and learned Editors who have preceded us in the same field.

【訳】このような意見の一致から、私たちは、この編纂本が本当に必要なものを提供するものであることが理解されると同時に、本全集計画の斬新性を以て、この分野の数多の有能かつ学識あふれる先達たちに取って代わろう、あるいは、競わんとする意図であるとの疑念を拭払してくれることを期待する<sup>30)</sup>。

グローブ版をシェイクスピア生誕300年に間に合わせて出版したことに疑問の余地はない。マクミラン社の目標は、3年間で50,000部売ることであった。実際には、1週間で初刷り20,000部が完売した。そして、1867年までに総部数100,000部、1911年までには総計244,000部を売ったのである<sup>31)</sup>。

ケンブリッジ版全集とグローブ版が刊行されて以来、参照を必要とする場合に、両全集（特に、グローブ版）に付された行番号が大いに有用であり、多くの編纂本でそれが用いられた。*The Riverside Shakespeare* (1<sup>st</sup> ed.) は、1974年時点に於いてさえ、行番号をグローブ版に従っていた。また、様々なレファレンス図書も本文と共に行番号が用いられた。その代表格として、Alexander Schmidt, ed. *Shakespeare-Lexicon: A Complete Dictionary of All the English Words, Phrases and Constructions in the Works of the Poet* (2 vols.

Berlin: Georg Reiner, 1874-75年) と John Bartlett, ed., *A New and Complete Concordance or Verbal Index to Words, Phrases & Passages in the Dramatic Works of Shakespeare with a Supplementary Concordance to the Poems* (Boston: Little, Brown & Co., 1894年) を挙げることが出来る。そして、現在でも有用とされる E. A. Abbott, *A Shakespearian Grammar: An Attempt to Illustrate Some of the Differences between Elizabethan and Modern English* (London: Macmillan, 1869年) もそうである。著者がこの文法書をグラマー・スクール生徒の利用を念頭に置いて著したことは興味深い。アボット (Edwin Abbott 1838-1882年) もまたケンブリッジ大学セント・ジョーンズ・コレッジに学び、古典、数学、神学を専攻して最優秀成績で卒業している。初版の序には、古典学の規則をエリザベス朝英語の批判的研究に適用する試みである旨が記されている。また、第3版の序には、ドイツ人学者 Matzner 著 *Englisch Grammatik* (3 vols. Berlin 1865) を大いに利用したことが記されている<sup>32)</sup>。

冒頭で述べたとおり、19世紀英国で出版されたシェイクスピア全集の数は膨大である。その中からケンブリッジ版全集のみを取り出して、19世紀シェイクスピア作品編纂全体を語るとしたら、軽率の誹りを免れないであろう。そうではなくて、それだけ多くの編纂本(校訂本)が出版されたにもかかわらず、他の校訂本とは異なり、20世紀中盤まで約1世紀の間その価値を保ち続けたのはなぜか? ——拙論で筆者が試みたことは、その理由を本文校訂理論・実践の歴史から検証したいということであった。簡潔に述べるならば、ケンブリッジ版編纂方針が、古典校訂の知識と経験に裏付けられた、また、ドイツを中心とした汎ヨーロッパ的聖書・古典文献学の最新理論・実践に倣い、英語作品の校訂版を作り上げようとしたことである。シェイクスピアF1出版時から、シェイクスピアをギリシア・ローマ古典詩人と並列したいという欲求が根強く英国にはあった——17世紀には、主に、シェイクスピア作品の質の高さに焦点が当てられた。18世紀には、至

高の詩人としてシェイクスピア崇拝が湧き起こった。古典詩人の校訂版・批評の歴史が一望出来る集注版があるように、母国語によるシェイクスピア集注版があるべきだという理念に基づく集注版シェイクスピア全集編纂・出版、など<sup>33)</sup>。英語による作品を古典語作品と同列に置いて、古典作品編纂の手続きを、最高の母国語作品であるにもかかわらず、解釈学にはほとんど触れることなく、本文構築に専念するという編纂方針は、既に言及した *Rolls Series* (*Rerum britannicarum medi aevi scriptores* 1858-91年) *EETS* (1864-年)、そして、少し後のことになるが *MSR* (*The Malone Society Reprint*, 1906年～現在) に共通する理念である。マロウン協会のモットーは 'The permanent utility of original texts' とある<sup>34)</sup>。このような時代精神が、19世紀半ばから20世紀初頭にかけての書誌学・本文校訂学を支えていた、と想定して差し支えない。そして、ケンブリッジ版はその先駆けであった。

\* 小論で言及されている人物の経歴などは次の資料による。文中では特に出典を明示しない。

*Dictionary of National Biography*, 1885-1900 (*DNB*). [https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary\\_of\\_National\\_Biography,\\_1885-1900](https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary_of_National_Biography,_1885-1900)

*Dictionary of National Biography*, 1901 *Supplement* (*DNB01*). [https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary\\_of\\_National\\_Biography,\\_1901\\_Supplemental\\_Volumes\\_and\\_1904\\_Errata](https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary_of_National_Biography,_1901_Supplemental_Volumes_and_1904_Errata)

*Dictionary of National Biography*, 1912 *Supplemental Volumes* (*DNB12*). [https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary\\_of\\_National\\_Biography,\\_1912\\_supplement](https://en.wikisource.org/wiki/Dictionary_of_National_Biography,_1912_supplement)

*The Oxford Dictionary of National Biography*, 60 vols. (Oxford University Press, 2004).

Robert Sinker, *Biographical Notes on the Librarians of Trinity College on Sir*

*Edward Stanhope's Foundation* (Cambridge Antiquarian Society, 1897).

注

- 1) Andrew Murphy, *Shakespeare in Print* (Cambridge University Press, 2021, Second Ed.) p. 209. ただし、この出版数にはリプリントが多数含まれている。
- 2) 拙論「編纂者ニコラス・ロウへの道」（『人文研紀要』第80号、2015年）pp. 17-39. 参照せよ。
- 3) Gary Taylor, *Reinventing Shakespeare* (Oxford University Press, 1989: Vintage Edition, 1991) p. 187.
- 4) D. J. Palmer, *The Rise of English Studies* (Oxford University Press for University of Hull, 1965) p. 79.
- 5) *The Cambridge Shakespeare*, vol. 1, pp. ix-x.
- 6) *The Oxford Companion to the Book*, ed. Michael F. Suarez, S.J and H. R. Woudhuysen, 2 vols. (Oxford University Press, 2010) vol. 2, p. 854.
- 7) David Greetham, *Textual Scholarship: An Introduction* (Garland Publishing, 1992) pp. 320-3および *The Theories of Text* (Oxford University Press, 1999) pp. 175-6 および “A History of Textual Scholarship”, *The Cambridge Companion to Textual Scholarship*, ed. by Neil Fraistat and Julia Flanders (Cambridge University Press, 2013) pp. 31-3を参照せよ。
- 8) Prince and Cooke, *A select catalogue of German books; with the subject of each in English. And an appendix of the best editions of the classics, and some French books, published in Germany* (Oxford, 1789) p. 3.
- 9) Murphy, *Shakespeare in Print*, p. 251.
- 10) Murphy, *Shakespeare in Print*, p. 252.
- 11) ‘*Romeo and Juliet*’: *A Critical edition of the Two First Editions, 1597 and 1599, on Opposite Pages with Various Readings to the Time of Rowe. With an Introduction [in German]* by Dr. T. Mommsen (Oldenburg; G. Stalling, 1859).
- 12) <https://philsoc.org.uk/about-philsoc>
- 13) T. H. Howard-Hill, “English Renaissance: Non-Shakespearean Drama”, *Scholarly Editing: A Guide to Research* (The Modern Language Association of America, 1995) p. 234.
- 14) <http://www.bible-researcher.com/ervhistory.html>
- 15) *The Cambridge Shakespeare*, vol. 1, p. xii.
- 16) *Ibid.*, p. xii.

- 17) 筆者による試訳。
- 18) Greetham, *Textual Scholarship*, pp. 324-5に詳しい記述がある。
- 19) 「底本原理」(The Rationale of Copy-text) は新書誌学に基づく本文校訂理論。グレッグ (W. W. Greg 1875-1959年) の提唱した理論 (1950年)。彼もまたケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ卒業生。同コレッジ図書館長を勤めた (1907-1913)。
- 20) *The Cambridge Shakespeare*, vol. 1, pp. xiii-xiv を参照せよ。
- 21) *Ibid.*, p. xv 参照せよ。
- 22) *Ibid.*, pp. xv-xix 参照せよ。
- 23) *Ibid.*, pp. xix-xx 参照せよ。
- 24) *Ibid.*, pp. xx-xxi 参照せよ。
- 25) Murphy, *Shakespeare in Print*, p. 254.
- 26) *The Cambridge Shakespeare*, vol. 1, pp. xli-xlii.
- 27) Murphy, *Shakespeare in Print*, p. 219.
- 28) <https://seriesofseries.com/globe-edition/>
- 29) *The Globe Shakespeare* (Macmillan 1864) p. vi.
- 30) *The Cambridge Shakespeare*, vol. 1, p. xi.
- 31) Murphy, *Shakespeare in Print*, p. 220.
- 32) E. A. Abbott, *A Shakespearian Grammar* (Macmillan, 1870 3<sup>rd</sup> ed.) pp. xxiii / 2.
- 33) 拙論「集注版シェイクスピア全集という理念」秋山嘉編著『近代を編む：英文学のアプローチ』(中央大学人文科学研究所 研究叢書76), 中央大学出版部, 2021年, 3-23頁参照せよ。
- 34) この 'original' の意味するところは, 本文校訂で言うところの意味ではない。マロウン協会リプリントは, 特定作品の (活字またはリトグラフによる) ファクシミリ版である。